考

〔伊豆海島風土記下産物〕ツバキ　島々ニ多シ、花ハ一重ノ紅ニテ、八月ヨリ咲キ四月迄絶エズ、島人此實ノ油ヲトリテ菜ヲ煮テ喰フ、又國地ニ出シテ穀ニ交易ス、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年五月癸酉、渤海使史都蒙等歸蕃、○中略緣都蒙請、加附○中略海石榴油一缶、

〔延喜式十五内藏〕諸國年料供進○中略

海石榴油一十斛

〔延喜式二十四主計〕凡中男一人輸作物○中略海石榴、吳桃、閉美油、各三合、

〔古今要覽稿草木〕つばき　海石榴○中略

椿雜載

椿の名たゝる所は、巨勢山はさら也、常磐山、音羽山、神山、鏡山、穴師山、朝日山、三上山、美濃の御山、宮城野等なるよし、

〔倭訓栞中編比二十一〕ひのきつばき　山茶花の葉の中に栢葉をまじへたる奇品なり、寄生の品とみえたり、近江伊勢三河などにあり、埃囊抄に、弘法大師槇尾寺に在し時、檜葉をもて御手を摩清めて、そこに在ける椿の上に投繫て誓はく、我宿願遂べくんば、此葉彼木に生著べしと、檜葉忽ち生著て椿になる、今に在、是を世に柴手水とふいと見えたり、今ゑばしといふ里あり、伊勢鈴鹿郡高宮に此品多くあり、鈴鹿山中には、賢木多く生たり、安濃津に多羅葉木瓜柃梅もときにも生せり、

〔古今要覽稿草木〕ひのきつばき　あやつばき

ひのきつばきは、一名をあやつばきといふ、此樹は伊勢國鈴鹿郡つばきの神社の境内、及び同郡高宮村などに多し、即椿の枝に檜の枝さしまじりて、花は常のつばき也、されども紅白の二種あり、寛保年中台命によりて、彼村より二樹を奉りしを、吹上の御園に植させ給ひしより、今三緣山